

研究論文

18世紀におけるジョン・ミルトンの政治的文献批評とイギリス・ロマン派詩人の自由思想との関連—ロバート・サウジーとの関連を中心に

園井千音*

The Relationship Between the Critical Milieu of John Milton's Political Writings in the Eighteenth-Century England and Liberal Ideology of Romantic Poets—
Particularly in the Relationship with Robert Southey

Chine SONOI

Political works of John Milton's were discreetly ignored by critics in the eighteenth-century England partly because they were regarded as not virtuous as his poetical outputs, even being taken to reveal dangerous dimensions of Milton's oeuvres to be investigated. Robert Southey, on the other hand, seemed to have had a clear understanding what the idea of republicanism was in the intellectual climate of the English mind in 1649. Southey's fundamental belief in the republican mind and liberal ideology did not in itself waver during his lifetime. For instance, the vigorous energy which the story of *Joan of Arc* had kept stimulated Southey's liberal mind through his life. Southey's continuous concentration on this thesis must have its roots inherited from Milton's time through the revolutionary and enlightenment ages in Europe.

Key words: Milton, Southey, republicanism, *Defences*, *John of Arc*

1. はじめに

18世紀においてジョン・ミルトン(John Milton)の政治的文献は王政復古以降出版されることがほとんどなかった。¹これはミルトンがイギリス市民戦争(1642-46, 1648-49, 1649-51)とチャールズ1世処刑による1649年の共和制樹立に深く関与した事実が政治的に危険視されたことと無関係ではない。ミルトン文学批評は彼の詩、主に『失樂園』(*Paradise Lost*) (1667)の芸術的成熟性の批評に集中し、彼の政治

的特質は「特異で狂気」(“distempered and furious”)として詩的成熟性の批評に集中し、彼の政治的特質は語られその複雑な思想の評価が適切になされてきたとはいえなかった: “Yet [...] may I presume to observe in his favour, that his zeal, distempered and furious as it was, does not appear to have been inspired by self-interested views.”² いわば18世紀前半までのミルトン文学批評においては、ミルトンの「王殺し」を支持する共和主義的特質は16世紀以降安定した君主制を維持してきたイギリス社会において社会的政治的に逸脱した部分として意図的に閉脚され、そのピューリタンの厳格さと相まって18世紀イギリス社会の多くの人々にとって好意的に解釈されるこ

令和1年12月31日受理

* 大分大学理工学部創生工学科

とはなかった。

一方、ミルトンの詩作品、特に『失樂園』は1705年から1800年の間に100版以上印刷され³、18世紀イギリス文学批評においてはその芸術的完成度が称賛された。例えば、雑誌スペクテイター（“The Spectator”）においてジョゼフ・アディソンは『失樂園』はホーマー『イリアッド』（*Iliad*）やヴァージル『アエネイス』（*Aeneid*）と匹敵し、それは「比類ない壮かさ」（“unquestionable magnificence”）に満ちた作品であると評した： I think . . . that there is all unquestionable magnificence in every Part of Paradise Lost. . .⁴ このような詩的芸術性に対する評価においては、ミルトンの政治的宗教的特性についての言及はほとんどみられず、極めて限定的なものであった。

ミルトン文学批評の不調和な傾向はしかしながら、1790年代イギリス社会において、社会改革運動と基本的人権への関心の高まりにより微妙に変化した。ミルトンが主張した共和主義思想は、特に社会改革論者たちにより、その社会改革の精神と自由尊重の趣旨が注目された。例えば、共和主義者で非国教徒牧師のリチャード・プライス（Richard Price）の政治的演説『我が国の愛についての談話』（*A Discourse on the Love of Our Country*⁵）の中でミルトンの自由思想は1789年に起こったフランス革命支持を補強する意味で引用された。（プライスのミルトンの自由思想の解釈については1650年代イギリス共和主義時代のコンテクストを17世紀後半から18世紀にかけてのヨーロッパ啓蒙主義の自由に関する思想と混同しているという問題があり、この点については後述する。）このように18世紀末のイギリス社会改革論においてミルトンの政治思想は人間の基本的自由確立を支持する文脈として理解されることが多くなった。また同時代の第一世代のロマン派詩人（ウィリアム・ブレイク [William Blake]、S.T. コールリッジ [S.T. Coleridge]、ロバート・サウジー [Robert Southey]、ウィリアム・ワーズワース [William Wordsworth] など）の間においては、ミルトンの共和主義思想は彼らの人間の平等や自由の精神への関心と呼応し、それぞれの共感の濃淡の差はあれ思想的影響を与えた。

例えば、サウジーは人間の自由追求と抑圧状態か

らの精神の解放という主題を5編の叙事詩『ジャンヌ・ダルク』（*Joan of Arc*）（1796）、『タラバ』（*Thalaba*）（1801）、『マドック』（*Madoc*）（1805）、『ケハマの呪い』（*The Curse of Kehama*）（1810）、『ロデリック—ゴート族の最後の王』（*Roderick, The Last of the Goths*）（1814）で書き続けた。その中でも特に『ジャンヌ・ダルク』はフランスの少女ジャンヌがイングランドとの戦争においてフランス人のために自由を獲得するというプロセスにおいてサウジーの共和主義思想への興味と関心を明確に示している。またサウジーは本作品の構想から第一版及び第二版の出版に従事している1792年から1797年の間、ミルトンとその思想に関する言及も手紙で多くみられ、ミルトンの自由思想に関心があったことがわかる。1837年までの5回の『ジャンヌ・ダルク』改訂版出版は、その自由追及の主題が詩人を終生惹きつけたことを示しており、本作品がサウジーのライフワークの一つとなったことは明らかである。

本論においてはサウジーとミルトンの自由の精神の類似点は何か、またサウジーの思想におけるミルトンの影響を検証する。

2. ミルトンの政治的文献の出版歴とその批評

2.1 17世紀～18世紀ミルトンの政治的文献出版の状況と批評

18世紀に出版されたミルトンの政治的文献の全集は、トマス・バーチ編集1738年版（*A Complete Collection of the Historical, Political, and Miscellaneous Works of John Milton*, ed. Thomas Birch, [London, 1738]）及びリチャード・バロン編集1753年版（*The Prose Works of John Milton*, Richard Baron, [London, 1753]）の二つしかない。これらは1698年のジョン・トーランド編集の散文全集⁶を底本としている。これらの全集は共和主義思想者トマス・ホルスを中心とするホイッグ党知的サークル「コモンウェルスマン」（“Commonwealthmen”⁷）により出版され、その仲間内で読まれた。またこれらの散文集は四つ折り版で大変高価であり、おそらくその読者層は限られていたと推測できる。

1660年5月29日チャールズ1世の次男チャール

ズ 2 世による王政復古以降、ミルトンの政治的散文『偶像破壊者』(*Eikonoklastes*) (1649) 及び『英国民のための第一弁護書』(*Defensio pro populo Anglicano*) (1651, rev.1658) は発禁処分を受け、さらにミルトン自身も 10 月から 2 か月間程度投獄され、友人のアンドルー・マーヴェル(Andrew Marvell)らの尽力により反逆罪による処刑を免れるという不運な時が続いた。王政復古後の共和主義思想者に対する糾弾と復讐は執拗に続き、ミルトンが『第二弁護書』(*Defensio Secunda*) (1659) において懸念していたように、共和制の「失敗」(“miscarry”) はミルトンのような共和主義支持の議会派にとっては、実際、その自由確立の理念が覆されたことによりこれ以上ない屈辱(王政復古)をもたらすこととなった:

If the republic should miscarry, . . . and as quickly vanish, surely no greater shame and disgrace could befall this country.⁸

実際、ミルトンが『第二弁護書』を出版した直前 1653 年にはクロムウェルを護民官とする政治体制が始まり、これはミルトン及び主要なロバート・オーヴァートン⁹などの議会派が基本的概念としてきた君主制を否定する議論と政治理論上矛盾した。ミルトンの『第一弁護書』改訂版及び『第二弁護書』における論調は、自由の精神の重要さの議論に集中することにより、このような市民戦争後の共和主義体制の変遷をもたらす自由主義崩壊危険を徹底的に防御するというミルトンの姿勢が強く示される。特に『第二弁護書』においては共和制府のリーダーとして就任したクロムウェルに対し自由の理念の価値を再確認しその維持の責務の重大さを示す: “Consider again and again how precious a thing is this liberty which you hold . . .”¹⁰ クロムウェルに対する諫言という形式をとることにより、ミルトンはイギリス国民が共和制樹立で達成した自由の価値とこの稀有な成功がいかなる状況においても維持されなければならないことを強調する。

ミルトンの共和制の信念は「君主なき統治」であり、これはチャールズ 1 世処刑後に議会で決定されたコモンウェルス宣言の基本的理念と同義である。

1649 年 5 月 19 日の下院議会によるコモンウェルス宣言においてはイギリスの政治体制は「国王および貴族院なきままに」、「一つのコモンウェルスにして自由国として統治される」として規定される。¹¹ ミルトンもそれに呼応するように『第一弁護書』において「君主を取り去らねば共和国(コモンウェルス)を破壊することになる。君主が所属するのはコモンウェルスではなく私有財産なのだ」¹² と論じ、イギリスは一つの君主の統治なき自由国となることを目指した。

果たして護民官制度がクロムウェルの理想とした執行体制であったかということには議論の余地があり、また共和体制の基本的理念が市民戦争時から共和制樹立に至るまでにおいて変遷したのか、またクロムウェルと後述するジョン・ランバートなどを中心とする立憲政府を推進した議会派、またミルトンのコモンウェルス信念との観念的乖離があったのかどうか、についてはより詳細かつ正確な分析を必要とし今回は疑問を呈するにとどめる。少なくとも後の歴史が示すようなクロムウェルの護民官制度に対する軍事的独裁制という評価は君主制擁護また国教会中心思想の観点における批評といえることができる。

事実はクロムウェルは 1653 年 12 月 12 日に議会が “Instrument of Government” を採用する直前に王位に就くように要請されるが拒否した。ジョン・ランバートは新体制として制限的な君主制を考案し、その君主をクロムウェルにと考えていたが、クロムウェルは王という立場には無関係であることを望んだ。彼は護民官就任後、1657 年 5 月に正式に再度王位就任を要請されるが固辞している。¹³ この王位拒否が示すことは、クロムウェルは共和制府を専制政治にすることを極力避けたということと、自らの役目と義務についてよく認識していたからだといえる。これはクロムウェルの人物像を理解するうえで大きな手掛かりとなる点である。¹⁴ 護民官という形式とそれに就任することもまたクロムウェルの本意ではなかった。また護民官の権限は国王チャールズ 1 世の時代よりはるかに制限されたものであり立法府と執政との分離は明確であり、議会と護民官の間の権限はほぼ同等、一方を独断的に解散、解職することは極めて困難だった。¹⁵

クロムウェルが共和制政治において目的としたことは、例えば、貧困者などの処遇に関する社会的改革であった。それは1650年ダンバーの戦い後に、彼が下院議会に送った手紙における貧困者に対する共感に示される。クロムウェルは社会的に抑圧されたものの解放を望み、多くの貧困者が少数の富裕者の富を形成することはコモンウェルスとしてはふさわしくないと伝えた：“... if there be any one that makes many poor to make a few rich, that suits not a Commonwelath.”¹⁶ また彼は特に貧困者が借金のために収監されることに対し、同情していたが護民官に就任しても実際の改革は遅々として進まず、そのことについて晩年、議会に対し、不満を述べている。¹⁷

このようにみえてくるとクロムウェルの護民官政治は彼の独断による執政とは程遠く、常に議会との交渉により行われていたということでありそれはまた彼の望む運営方法でもあった。しかしながら特に市民戦争直後の18世紀におけるクロムウェルと共和制府に関する批評、例えば、デイヴィッド・ヒューム(David Hume)の『イギリスの歴史』(*History of Great Britain*) (1754-61)¹⁸ などにおける批判的論調は、イギリス国内において18世紀以降の反共和制のイデオロギーを醸造した一つの要因といってもよい。ヒュームによれば共和制府は「狂信者たち」(“frantics”)と一般的に評され、実際の政治体制については詳細に論じられず、ピューリタンに対する批判姿勢が一貫している：

The horror and antipathy of these enraged fanatics had, for many years, been artfully fomented against Charles...¹⁹

ヒュームの歴史観に共感する国民的意識が少なくとも18世紀イギリスには大半を占めていたということだろう。この評価は20世紀においても根強く残っていたことはTimothy Langが、*The Victorians and the Stuart Heritage: Interpretations of a Discordant Past* (1995)において、ヒュームのクロムウェル像を大きく変える歴史家はいないだろうといったことが示している。²⁰

1640年代～50年代の市民戦争と共和制の再評価は非国教徒の社会的権利要求などの改革が盛んになる19世紀半ばにかけてのウィリアム・ゴドウィン(William Godwin)の『コモンウェルスの歴史』(*History of Commonwealth*) (1824) もしくはトマス・カーライル(Thomas Carlyle)のクロムウェル自伝『オリヴァー・クロムウェル』(*Oliver Cromwell*) (1845)などの出版をまたなければならない。

さてミルトンと共和制をとりかこむイギリスの国情はどうだったのか。1650年代共和政府は国体の体系化を進める一方で常に王党派との葛藤が共存しており、君主制の復活防御の戦いは水面下で存続していた。1648年12月のプライド大佐の粛清により逮捕もしくは議会から締め出された王党派と長老派議員は政権奪回を狙っており、またチャールズ1世の息子であるチャールズ2世は1651年1月スコットランドで王位宣言を行い、国情は不安定であった。ミルトンの『第二弁護書』における共和制樹立の価値の強調は、このような社会的政治的懸念に関する鋭い認識を示す。母国イギリス、また王党派との戦いにより傷ついた多くの勇敢な兵士たちの希望と自由が託された制度としての共和国の運命がクロムウェルの執政にかかっているという主張はクロムウェルと共和国政府のための政治的言及という意味合いを超えミルトンの真の道徳的信念を示す論調となっている：

... honour your country's singular hope in you.
Honour the faces and the wounds of the many brave men, all those who under your leadership have strived so vigorously for liberty.²¹

人間の自由の精神と理性に価値を見出すミルトンの宗教的かつ政治的信念の実現のためにも共和制は守られるべきものであることが強調される。

しかしながら、このようなミルトンの自由の思想の批評は、政治的出版物が発禁処分を受けた17世紀後半からバーチ編纂の全集が出版される約80年間の間、流布した文献の圧倒的な少なさにより、十分な批評が困難であった。これは先にも述べた通り、共和制とピューリタンの宗教改革に対する批判の影

響による散文出版の閉脚が原因である。ミルトンの芸術性の理解はその宗教的政治的性質の詳細な分析が部分的にしかなされないまま一部の詩作品のみの解釈により成立していた。²²

2.2 18 世紀末イギリス社会改革運動とミルトン政治的散文批評の問題点

ミルトンの政治的文献とその批評に変化が現れたのは 1790 年代後半、ヨーロッパ諸国における権利拡張運動の結実としてフランス革命がおり、イギリス国内でも非国教徒、工場労働者、奴隷貿易廃止論者などにおける様々な立場における社会改革運動が盛んになった時である。その際には 1640 年代～50 年代の共和主義思想の再評価と共にミルトンの政治的散文、特に『アレオパジティカ』(*Areopagitica*) (1644)、『偶像破壊者』(*Eikonoklastes*) (1649)、『自由共和国樹立の要諦』(*A Ready and Easy Way to Establish a Free Commonwealth*) (1660)²³、などがパンフレット形式で出版され、非国教徒やホイッグ党、また共和主義支持のグループ内で回覧されていた。

この際、18 世紀末のミルトン批評は急進的もしくは穏健な社会改革論者の異なる思想に沿うように解釈される傾向があり、1640 年代から 50 年代イギリスにおけるミルトンの論じる自由の精神の重要さが適切に理解されていたかどうかについてはまた問題がある。ミルトンの共和制思想は非国教徒を中心とする社会改革論者の間で自分たちの政治思想を補強する一種のプロパガンダとして注目された。

例えば、二つの『弁護書』また『自由共和国樹立の要諦』における絶対王政に対する疑義と国民中心政治の主張は当時の人間の基本的人権である自由を確保しようとする社会改革運動のスローガンと一致するものと解釈された。リチャード・プライスの『談話』においては、ミルトンの政治思想は、ジョン・ロックやシャルル・ド・モンテスキューの思想と同時に語られ、それが社会改革をもたらす啓蒙的インパクトを社会に与えたと論じられた: “Such were Milton, Locke . . . Montesquieu . . . They sowed a seed which has since taken root, and is now growing up to a glorious harvest.”²⁴ ここにおける “glorious harvest” が 1688 年に起こった名誉革命を示唆する場合、ミル

トンの思想は君主制擁護と同質の穏健な自由拡張思想と解釈されたといえる。ジョゼフ・クロフォードも *Raising Milton's Ghost* (2011) で指摘しているが、プライスの議論においてはミルトンの共和制思想は穏健なホイッグ的自由思想と評され、そのため君主制維持の名誉革命の理念と同質とみなされた。²⁵ ミルトンの政治思想を 1640 年代の政治的緊迫度を考慮せず、イギリスの自由の救い主として非政治化する解釈はすでに 17 世紀末には存在した。例えば、それはネイハム・テイト (Nahum Tate) の詩におけるウィリアム 3 世の登場を見守るミルトン像に現れる:

Behold where MILTON Bow'rd in Lawrel Groves,
...
Himself a Seraph now, ...
Draws Scheme proportion'd to great WILLIAM's
Fame; ...²⁶

テイトはウィリアム 3 世治世における桂冠詩人であり、その筆致にはミルトンを自分と同じ立憲君主制支持の文脈で描くことに躊躇がみられない。彼にとりミルトンはイギリスの国民詩人であり、共和政府の中心的役割を果たしていたミルトンの政治的理念は意図的に閉脚されていることが示唆される。これは先述した 18 世紀初頭の批評家 Elijah Fenton などがミルトンの共和制との関係を一過性のものとして解釈する姿勢と共通する。プライスのミルトンに対する共感もミルトンをイギリスの伝統的秩序の範囲の中での自由主義者と解釈するという思想的傾向が影響している。

一方、18 世紀末のイギリス社会改革運動に影響を与えた革命期のフランスにおいては、急進主義者の政治的集まりであるジャコバンクラブにおいて、ミルトンの胸像が展示されていた。²⁷ ジャコバン派オノーレ・ミラボー (Honoré-Gabriel de Riqueti, Comte de Mirabeau) による『アレオパジティカ』や『第一弁護書』の 1788 年、1792 年における翻訳版出版はミルトンの政治的思想がジャコバン派の共感を得たことを示し、フランス革命の君主制廃止達成のためにその自由の概念が政治的に利用されていたといえ

る。

このようにミルトンの政治的主張は社会や時代の思想的受容の影響を受け、常に適切に理解されてきたというわけではなかった。

3. サウジーとミルトン

3.1 ミルトンとロマン派詩人

18世紀末の第一世代のロマン派詩人、ブレイク、ワーズワース、コールリッジ、サウジーにとってのミルトン評価はどうであったのか。ロマン派詩人はミルトンの「とげとげしい無愛想な共和主義者」²⁸という典型的な批評に反し、彼を自分たちの芸術的手本とした。これはロマン派詩人の18世紀末ヨーロッパの革命的気運に対する賛同と彼らの基本的観念である自由への希求が17世紀市民戦争を経験したミルトンの理念と一致したからだ。Joseph A. Wittreich, Jr. が *The Romantic on Milton* (1970) で述べるように、ロマン派詩人にとりミルトンは「権力支配に対する反抗者、共和主義者、因習打破主義者、そして素晴らしい詩人であり、崇高な思想家」²⁹であったという観点はロマン派詩人特有の思想的特徴を考慮に入れても適切な観点であるといえる。ロマン派時代のミルトン批評にはそれまでのミルトン批評における偏向（宗教的異端視と政治的姿勢に対する偏見）が比較のみられず、その芸術性と思想に対する評価がバランスの取れたものであったと考えることができるからだ。これは一つにはロマン派詩人特有の自由を尊重する芸術的感性と非国教徒に共感する政治的宗教的思想が彼らのミルトン評価に影響を与えたからだ。18世紀末のイギリスにおいてはユニテリアン、クエーカーなどを中心とする非国教徒による選挙権や政治的権利獲得を目指す社会改革活動が盛んになった時期であり、ロマン派詩人もこの活動に積極的に関与した。コールリッジは大学時代のチューターであったユニテリアン教徒ウィリアム・フレンドの影響を受け、ユニテリアンに改宗後、非国教徒が多く出入りしていたフランス革命を支持する「ロンドン革命支持協会」(“London Corresponding Society”)にも出入りしており社会改革の実際的活動に興味をもっていた。1794年にオックスフォードでコールリッジと出会ったサウジーもユニテリアンコールリッ

ジの社会改革思想に影響され、その後、奴隷貿易廃止運動やコールリッジが「パンティソクラシー」と名付けた平等社会実現運動に参加するようになる。このように1790年代ロマン派詩人の多くはミルトンの共和主義的思想と宗教性に対する理解が基本的に存在したということだ。

それに加えミルトンの芸術的成熟はロマン派詩人の詩作を常に刺激するものであったといっても過言ではない。例えば、ブレイクはその詩的芸術性の追求において、ミルトンの思想的側面に焦点を当て詩作を行った。『ミルトン』(1804-8)においては、ミルトンが『失樂園』、『樂園回復』(1671)を書く過程で経験した葛藤を想起することでブレイク自身の精神的混乱からの回復を目指し、それは『エルサレム』(*Jerusalem*) (1804-20)で完結した。またワーズワースはイギリスの詩人としての一つの自負の証明ともいえる長編叙事詩作成時の重要な指針としてミルトンを念頭においておいていたことは『序曲』(*The Prelude*) (1805)において明らかである。『序曲』における時代や場所、形式についての想定過程について述べながら、ワーズワースは自分もミルトンと同様、詩的テーマに関する葛藤を経験したことを語る：“I settle on some British theme, some old/ Romantic tale, by Milton left unsung: . . .”³⁰ここで「ミルトンが歌わないままであったブリトン人のある古い物語」とは、ミルトンが叙事詩の主題の候補として『アーサー王物語』を考慮していたことを示唆しており、ワーズワースの心にはミルトンがその理想として存在していたことは明らかである。

コールリッジにとってミルトンは完璧な詩の形式を実現した詩人であった。『文学評伝』(*Biographia Literaria*) (1817)における詩人とは何か、という議論において詩人はその作品においてイメージをいきわたらせかつそれを統一した形式に発展させる能力を持つべきという：

The poet, . . . in *ideal* perfection, brings the whole soul of man into activity, . . . He diffuses a tone and spirit of unity, . . . by that synthetic and magical power, to which we have exclusively appropriated the name of imagination.³¹

コールリッジにとり、ミルトンはそのすべての芸術的要素を想像力により統合できる詩人だった。

ここでミルトンの政治的散文集をどれだけロマン派詩人が読んだか、ということだが、その多くは一編がパンフレット形式で私家版として出版されたものである可能性が高い。³² よく流布していたのは『アレオパジティカ』(1644)である。『アレオパジティカ』の主題である表現の自由と宗教的寛容に関しコールリッジは自分が編纂していた雑誌 *The Friend* (1809-1810) において数回言及し、特にミルトンが 1643 年に施行された検閲法を批判する文脈において、検閲法により悪を強制的に省くのではなく、善いものも悪いものも平等に世の中に出回るべきであり、それにより人間は善を学ぶ姿勢が育つと主張している部分を引用することによりミルトンの道徳観に関する興味と共感を示した。³³ またワーズワースも同様にこの部分についてのミルトンの雄弁さを称賛した：

The *Friend* cited, some time ago, a passage from the prose works of Milton, eloquently describing the manner in which good and evil grow up together in the field of the world almost inseparably; . . .³⁴

『アレオパジティカ』がロマン派詩人に好まれた理由は、善と悪を含む総合的な物事の価値を認めようとしたミルトンの柔軟な思考がロマン派の人間の哀しみや怒り、喜びという基本的感情に道徳的メッセージを感得した感性と呼応したからだ。

3.2 ミルトンのサウジーへの影響

サウジーはロマン派詩人の中においても最もミルトンの主張した人間の自由の思想に注目したといえる。サウジーは抑圧から人間の精神を解放し、自由を追求する主人公を5編の叙事詩(『ジャンヌ・ダルク』[1796]、『タラバ』[1801]、『マドック』[1805]、『ケハマの呪い』[1810]、『ロデリック—ゴート族最後の王』[1814])で書き続けた。その中でも特に『ジャンヌ・ダルク』は15世紀のイギリスとの領土争いにおいてフランス人の少女ジャンヌが自国の人のために自由を獲得するという過程を描くことでサウジ

ーの共和主義思想に対する共感が最もよく現れた作品であるということが出来る。サウジーは本作品執筆中の1792年から1797年の間、ミルトンとその思想への言及も手紙などで多く見られ、ミルトンの自由の思想及びその芸術的才能に関心があったことがわかる。

サウジーは1794年友人のグロブナー・チャールズ・ベッドフォード宛ての手紙においてジャンヌは「自由の守り神」であり、その作品が「ミルトンの崇高さ」(“the sublimity of Milton”)をもつような作品になればよいと願った：“I am well convinced that if my Joan of Arc possessed . . . the sublimity of Milton, . . .”³⁵ また1797年7月19日付の友人チャールズ・ワトキン・ウィリアムズ・ウィンへの手紙における叙事詩をよりよく書きたいというサウジーの望みと彼の芸術的理想としてミルトンの「比類ない」才能についてのコメントは彼のミルトンの芸術的才能に対する評価と称賛を示す：

I can manage the Epic better, & that has every dramatic advantage if well handled . . . with Homer & Milton no future indeed no other poems can be compared the age of the one & the subject of the other preclude it, independant of their unequalld & perhaps *unequalable* merit.³⁶

サウジーが『ジャンヌ・ダルク』をミルトンの叙事詩、(ここでは『失樂園』が当然サウジーの心にあったことが考えられるが)、のような芸術的完成度を持つ作品にしたいと考えていたことがわかる。

さて、サウジーのミルトンの政治的散文に関する読書歴であるが、バーチ版の全集とジョージ・バーネット編集の全集(1809)を読んでいたことは明らかである。バーチ版に関しては1799年9月³⁷及び10月のコールリッジからサウジー宛の手紙において言及されており、この全集がサウジー、チャールズ・ロイド、チャールズ・ラムなどの詩人の仲間で話題となっており十分にその存在が知られていたことがわかる：“I received from them [Charles Lloyd and Charles Lamb] . . . that with the Postage I might have bought Birch’s Milton.”³⁸ この間、サウジーとコール

リッジはパンティソクラシー実現のための資金を作るために『ジャンヌ・ダルク』³⁹や『ロベスピエールの失墜』(*The Fall of Robespierre*) (1794) の共同執筆に従事していたことからミルトンの散文集を共有していた可能性が高い。またサウジーの図書室のカタログ (1844 年出版) の中には、ミルトンの詩集に加え、バーネット編集の散文集 (*Prose Works, by G. Burnet, 2 vols [1809]*)⁴⁰ の記載もあることからサウジーが継続的にミルトンの総合的な思想に興味があったことを示す。

3.3 『ジャンヌ・ダルク』におけるミルトンの影響

サウジーは 1837 年まで 5 回『ジャンヌ・ダルク』を改訂し続けた。この改訂中も主人公ジャンヌを通して人間の自由を抑圧するものに対する鋭い批判と自由の追求の重要性を力強く伝える。例えば、ジャンヌは、フランスの戦士コンラッドに対し、イギリスの侵攻に対し戦うことは、「この世の最も高貴な報酬」⁴¹を導くとして鼓舞する。ここにおける「報酬」とはジャンヌが体現する自由の達成である。『ジャンヌ・ダルク』のテーマである悪徳を廃し、自由を保持する人間の尊厳の主張は、明らかにミルトンがその政治的散文で論じた点と呼応する。ミルトンは『第一弁護書』において英国国民の惨状を引き起こした元凶である王の排除は神の処罰であると論じた：

... these deeds were inspired by God is my belief when I recall the unexpected zeal and unity with which the whole army ... sent forth a single cry from almost every district of the realm for the punishment of that king who was the cause of all their woes."⁴²

君主制廃止が神の摂理により支持されるというミルトンの論理はイギリス国民の幸福、自由は神の意志により守られるべきものであることを示す。ミルトンは人間の自由の維持は宗教的正当性をもつと考えた。自由を獲得する行為は神の行いと同等であるという認識は、サウジーの描くジャンヌの姿に投影されたといえる。それはジャンヌの神に指名された解放者としての義務感、すなわち苦しんでいる人々の

ために自由を戦い取るという天命の悟りの過程において再現される：

... my soul awoke,
For it had slumber'd long in happiness,
And never feeling misery, never thought
What others suffer.⁴³

フランスの地方ドンレミ村で農業を営む両親の家に生まれ、幸福に暮らしてきた少女ジャンヌの神の啓示により魂が呼び覚まされる場面には、サウジーの自由に対する信念、その基底には自由の追求に宗教的意義を見出すミルトンの道徳的観点の影響が表れている。

『ジャンヌ・ダルク』の最終章はフランス軍の勝利を決定づけたパテーの戦いとランスでのシャルル 7 世の戴冠式で終わる。サウジーはジャンヌがフランスの人々のために自由を獲得した時点を詩の大団円として描くことにより、ジャンヌの戦いが神の意志に基づく正義の戦いであったことを強調する：“ Thus the Maid/ Redeemed her country. Ever may the ALL-JUST/ Give to the arms of FREEDOM such success.”⁴⁴ ミルトンが主に『第一弁護書』で論じた宗教的信念に支えられた共和主義思想に通底する自由獲得を正義であるとする観念と共通した要素が『ジャンヌ・ダルク』にはみられる。

サウジーが共感した共和主義思想の理念は、ミルトンの信念と同様に、自由と人々の安全が社会システムにより守られなければならないとする人道主義的な感性に基づくものであった。1790 年代にサウジーが興味を持ったのは、トマス・ペインやウィリアム・ゴドウィン⁴⁵の政治的思想であった。ペインは『人間の権利』(1791-92) において、君主と貴族は社会の腐敗と貧困の原因であると糾弾し、ゴドウィンの『政治的正義』(*Political Justice*) (1793)⁴⁵ における議論もペインの主張と類似していた。両者とも共和主義概念の実現の重要さと人間の自由と幸福を促進するための社会的改革の必要性を主張した。この意味において、1650 年代の共和主義はサウジーにとって、見習うべき直接の手本であるばかりでなく、彼が信じる社会的理論の提示でもあった。

ミルトンが論じたコモンウェルスの理念は現代的かつ進歩的かつ民主的だといえる。なぜならばそれは支配階級が少数の人々に限られ、またそれが君主、貴族、教会に独占されている時代に一般庶民の恩恵のために最高権力集中の廃止が必要であることを宣言したからだ。従って彼は以下のように論じる：

... unless you remove the master, you destroy the state, for it is some private property, and not a commonwealth, which owns a master.⁴⁶

1650年代と1790年代の社会的政治的違いはあるにせよ、ミルトンの信条、すなわち市民のための社会構造の様々な自由主義化は社会の前進を導くという主張は、その基本的な人道主義的考え方においてサウジーの道徳観と非常によく呼応した。

4. 結び

サウジーは1837年に自分が編纂した最後の詩集において『ジャンヌ・ダルク』を1巻目に監修する。なぜならば本作品はサウジーにとり、詩人としてのキャリアを始める重要な機会を与え、またその自由の思想が政治的に急進的であるとして厳しい批判を受けるという試練を最も強く受けた作品といえるからだ：“I have placed it first, because by it I first became known to the public, and acquired by it notoriety which has never been lessened.”⁴⁷ サウジーが生涯をかけて『ジャンヌ・ダルク』を編集し続けた理由はその「悪名」（“notoriety”）との葛藤において改訂を重ねていたことも一つの要因である。『ジャンヌ・ダルク』の初版は当時の文学界で話題となり、その好意的な批評も多くあった一方で⁴⁸、イギリス社会においては15世紀初頭における王位継承戦争においてフランス軍を率いる少女を主人公とし、イングランドを敵と描くという要素に対して、政治的急進主義のフランスのジャコバン派思想と同質であると解釈される傾向があった。

『ジャンヌ・ダルク』第二版である1798年版に関しても、政治的に保守的な雑誌である *Anti-Jacobin* はその主人公設定とイギリス軍が「不名誉な」（“ignominious”）敗北を喫した内容に批判的であり、

サウジーは伝統的叙事詩に反するものを書いたと糾弾した：

The established rule for epic, that the subject be national, is, surely founded on true patriotism. To this rule . . . [Southey] has acted in direct opposition and chosen . . . the ignominious defeat of the English . . .⁴⁹

Anti-Jacobin の批判的態度は『ジャンヌ・ダルク』とほぼ同時期に編纂された詩集 *Poems* (1797, 初版1795年)に対しても続き、このような批評の観点はサウジーが描く自由のテーマに対する政治的偏見を生み出す一つの原因となった。

サウジーが最後に編纂した詩集において『ジャンヌ・ダルク』を筆頭に収めたのは、このような批評史に対する詩人の抗議とジャンヌの自由獲得の戦いは道徳的に重要なメッセージであると信じたからだ。サウジーの詩人としての一生はこれらの批評との戦いであるともいえる。その中で、彼は自由とは何かを模索し『ジャンヌ・ダルク』を始めとする自由追求の主人公を叙事詩で書き続けることにより、その意味を探ろうとしていたのではないか。ミルトンの思想はそのような彼にとり、時代の差はあれイギリス社会における自由の実現を導いた重要な手がかりだったのだ。

謝辞

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金 JP17K02506 の助成を受けたものです。

註

¹ ミルトン全散文集は1738年と1753年に共和主義者の思想家トマス・ホリス（Thomas Hollis）により出版された。（cf. Joseph Crawford, *Raising Milton's Ghost* [London: Bloomsbury, 2011], p.11）

² Elijah Fenton, “The Life of Mr. Milton”, in John Milton, *Paradise Lost* (London, 1730), in Crawford, *Raising Milton's Ghost*, p.15.

³ 『失楽園』出版数については、以下、参照。R. D.

Havens, *The Influence of Milton on English Poetry* (Cambridge, MA: Harvard UP, 1922), p.4 qtd. in Crawford, *Raising Milton's Ghost*, p. 2.

⁴ *The Spectator*, No.267, London:1712 in *A Critique upon the Paradise Lost from the Spectator*, London, 1765, p 5.

⁵ 1789年11月4日にイギリスの名誉革命の100周年を祝うために設立された Revolution Society の会合におけるプライスの演説。

⁶ *A Complete Collection of the Historical, Political, and Miscellaneous Works of John Milton*, ed. John Toland (London, 1698), 3 vols.

⁷ Crawford, *Raising Milton's Ghost*, p.11.

⁸ John Milton, *The Second Defence of the English People* (1654), in *Complete Prose Works of John Milton*, gen. ed. Don M. Wolfe (New Haven: Yale UP, 1953-82), 8 vols., Vol. 4, 1650-1655, Part I, p. 673. 以下、本全集からの引用は CPW と表示する。

⁹ ロバート・オーヴァートン (Robert Overton) (1609-1668) 議会軍。ハルの総督 (1653年, 1654年) で 1643年のハルの攻防と 1644年6月2日議会軍が王党派軍に圧勝したマーストンムーアの戦いで功績をあげた。クロムウェルの護民官就任に関しては明確に疑義を表した。(cf. *The Second Defence*, CPW, 4, p. 677 n.)

¹⁰ Milton, *The Second Defence*, in CPW, 4, p. 673.

¹¹ “An Act Declaring England to be a Commonwealth” cited in S.R. Gardiner (ed.) *Constitutional Documents of the Puritan Revolution, 1625-60*, 3rd ed. (Oxford: Clarendon Press, 1906), p.388.

¹² ジョン・ミルトン, 『イングランド国民のための第一弁護論』, 『イングランド国民のための第一弁護論及び第二弁護論』, 新井明・野呂有子 訳 (聖学院大学出版会, 2003), p. 29. (以下 本翻訳本からの引用は新井・野呂と記す) cf. Milton, *The First Defence*, CPW, 4, p. 334. またイギリスにおけるコモンウェルスの概念については岩井 淳, 「コモンウェルス概念の史的変遷」, 『コモンウェルスとは何か』, 山本正・細川 道久編 (ミネルヴァ, 2014), pp. 19-41 参照.

¹³ Ian Gentles, *Oliver Cromwell*, (Basingstoke: Palgrave, 2011), p.156-57. “The First Anniversary of the

Government under H. H. the Lord Protector”, *The Poems of Andrew Marvell*, ed. Nigel Smith (London: Routledge), p. 294 n.

¹⁴ クロムウェルの人物像をよく知る上では、ミルトンと同様クロムウェル政権において外国語秘書官として執務していたアンドルー・マーヴェルのクロムウェル三部作が重要である。クロムウェル三部作についての詳細な分析は園井 英秀, 「クロムウェル三部作の形式と主題」, 『英文学と道徳』 (九州大学出版会, 2005), pp. 39-70 参照.

¹⁵ Gentles, *Oliver Cromwell*, p.157, Austin Woolrych, *Britain in Revolution*, (Oxford: Oxford UP, 2004), p.564.

¹⁶ Gentles, *Oliver Cromwell*, p.99, *The Letters and Speeches of Oliver Cromwell with Elucidations* by Thomas Carlyle, ed. S. C. Lomas, 3 vols, (London: Methuen, 1904), Vol. 2, p. 108. 以下、本書からの引用は Lomas-Carlyle と記す。

¹⁷ Gentles, *Oliver Cromwell*, p.99, Lomas-Carlyle, Vol. 3, p.113.

¹⁸ ピーター・キットソンはほとんどの歴史家の見解としてヒュームのクロムウェルと 17 世紀のピューリタンに対する描き方がその後の時代においてもとも影響があったと分析する。Peter Kitson, “Representations of Cromwell and the English Republic” in *Radicalism in British Literary Culture, 1650-1830*, ed. Timothy Morton and Nigel Smith (Cambridge: Cambridge UP, 2002) p. 186.

¹⁹ David Hume, *The History of Great Britain* (Dublin: John Smith, 1754-61), 6 vols., Vol. 2, p. 226.

²⁰ Timothy Lang, *The Victorians and the Stuart Heritage: Interpretations of a Discordant Past*, (Cambridge: Cambridge UP), p.14.

²¹ Milton, *The Second Defence*, in CPW, 4, p. 673.

²² 特にミルトンの 1630 年代作成の詩は 1645 年初版から 1673 年の『詩集』 (*Poems, &c., upon Several Occasions . . .*) 再版まで 30 年近く出版及び文学界から無視され世に出ない状態が続き 18 世紀末になり詩作品全体の芸術性が理解されるようになった。このことについては 1785 年出版のミルトン詩集を編纂した Thomas Warton が その序文で批判的に指摘した: “After the publication of the *Paradise Lost . . .*

other pieces of the same author, . . . they long continued to remain in their original state of neglect and obscurity. . . . At the infancy of their circulation, . . . they were overwhelmed in . . . the conflict of religious disputation, and the professional ignorance of fanaticism.” (John Milton, *Poems upon several occasions, English Italian, and Latin, with translations by John Milton*, ed. Thomas Warton (London, 1785), iii.

²³ その多くはトマス・ホリスが出版したパンフレット版だと思われる。(Crawford, p.16-20)

²⁴ Richard Price, *A Discourse on the Love of Our Country* (London: T. Cadell, 1789) p.14.

²⁵ cf. Crawford, *Raising Milton's Ghost*, p.22.

²⁶ Nahum Tate, *A Poem, Occasioned by His Majesty's Voyage to Holland* (London, 1691), in Crawford, *Raising Milton's Ghost*, p.14.

²⁷ Helen Maria Williams, *Letters from France*, 2 vols. (New York: Scholar's Facsimiles and Reprints, 1975), Vol. 1, p. 113-14.

²⁸ Samuel Johnson, *Lives of the English Poets*, (1779) (Dublin, 1779), 3 vols., Vol.1, p.196.

²⁹ Joseph Anthony Wittreich, Jr., *The Romantics on Milton* (Cleveland: The press of Case Western Reserve University, 1970), pp.11-12.

³⁰ William Wordsworth, *The Thirteen-Book Prelude* (Ithaca: Cornell UP, 1991), Vol.1, Book 1, ll. 180-81.

³¹ S. T. Coleridge, *Biographia Literaria* (1817) II, ed. James Engell and W. Jackson Bate in *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge*, gen.ed. Kathleen Coburn, (New Jersey: Princeton UP, 1983), 16 vols, Vol. 7, pp. 15-16. 以下、本全集からの引用は *CSTC* と表示する。

³² これらは二章で述べたトマス・ホリス出版のものなどである。

³³ *The Friend*, No.4 September 7, 1809, (*The Friend II*, in *CSTC*, 4, pp.60-61, footnote, cf., コールリッジは『アレオパジティカ』より以下を引用する: “ Good and evil we know in the field of this World grow up together almost inseparably; and the knowledge of good is so involv'd and interwoven with the knowledge of evil, . . . ”, Milton, *Areopagitica*, *CPW*, 2, pp. 514-17. Coleridge also argued that *Areopagitica* was one of the “good books” in

Coleridge the Talker: A Series of Contemporary Descriptions and Comments, ed. Richard W. Armour and Raymond F. Howes, (Ithaca, 1940), p. 174.

³⁴ Wordsworth, “Advice to the Young”, *The Prose Works of William Wordsworth*, ed. Alexander B. Grosart (London: Edward Moxon, Son, and Co., 1876), 3 vols, Vol. 1, p. 324.

³⁵ Southey, Letter to Grosvenor Charles Bedford, 14-21 July, 1793,

<<https://romantic-circles.org/editions/southey_letters/Part_One/HTML/letterEd.26.53.html>>

³⁶ Southey, Letter to Charles Watkin Williams Wynn, 19 July 1797,

<<https://romantic-circles.org/editions/southey_letters/Part_One/HTML/letterEd.26.237.html>>

³⁷ Coleridge, Letter to Southey, 25 September 1799, *Letters of Samuel Taylor Coleridge*, ed. Earl Leslie Griggs, (Oxford: Clarendon press, 1956), Vol. 1, p. 530. 以下、本書からの引用は Griggs と表示する。

³⁸ Coleridge, Letter to Southey, 15 Oct., 1799, Griggs, I, p. 542.

³⁹ 本論において分析する『ジャンヌ・ダルク』(1798)はサウジーの編集の過程でコールリッジの執筆部分がほぼ削除された第二版についてである。『ジャンヌ・ダルク』作成時の2巻最初の450行はコールリッジより書かれたが、第一版出版時(1796年)にサウジーにより大部分が削除された。本書の出版歴分歴についてはまた次の機会に議論する。(cf. Preface to *Joan of Arc* (1796), *Robert Southey: Poetical Works 1793-1810*, gen.ed. Lynda Pratt, 5 vols. (London: Pickering and Chatto, 2004), Vol.1 *Joan of Arc*, ed. Lynda Pratt, p.4., 以下、本書からの引用は *RSPW* と表示する。)

⁴⁰ *Catalogue of the valuable library of the late Robert Southey*, (London: Compton and Ritchie printers, 1844, Bounded by E. Evans 1971), p. 98.

⁴¹ Southey, *Joan of Arc* (1798), *RSPW*, 1, Book 4, l.368.

⁴² Milton, *A Defence*, *CPW*, 4, p.329-30.

⁴³ Southey, *Joan of Arc*, *RSPW*, 1, Book 1, ll. 328-31.

⁴⁴ Southey, *Joan of Arc*, *RSPW*, 1, Book 10, ll. 707-9.

⁴⁵ サウジーはブリストル図書館から『政治的正義』1巻を1793年10月25日と11月8日の間に、2巻を12月9日から19日の間に借りた。(cf. Southey, Letter to Grosvenor Charles Bedford, 27 September 1794, <<https://romantic-circles.org/editions/southey_letters/Part_One/HTML/letterEd.26.105.html>>

⁴⁶ Milton, *A Defence*, *CPW*, 4, p. 334.

⁴⁷ Southey, Letter to Joseph Cottle, 9 May 1837, *New Letters of Robert Southey* (New York: Columbia UP, 1965), 2 vols, Vol. 2 (1811-1838), p.467.

⁴⁸ *The Critical Review*, 16 (1796), *The Monthly Review*, 19 (1796), *Analytical Review*, 23 (1796) など。(cf. *RSPW*, 1, p. liv.)

⁴⁹ *The Anti-Jacobin Review and Magazine*, 3 (1799), p. 121.